

NPO×行政 知的障がい者の防災準備

3年目の取り組み(公助)

みんなが支え合えるような
優しいまちになれたらいい

協働事業の締めくくりとなる三年目のテーマは“公助”。

県立防災センターの防災ツアーに参加したり、

知的障がい者支援員であることを示すバンダナや

知的障がいについての特性をまとめた

パンフレット制作をおこないました。

バンダナは各地域の避難所に設置する予定で、

三年間で学んだ知識が詰め込まれたパンフレットは

行政と連携して市民へ配布していきます。



『NPO法人ほっとハウス』と『徳島市危機管理課』

の2者が取り組んだ協働事業。

テーマは“知的障がい者の防災準備”。

その取り組みは団体から地域へと、

少しずつ規模を広げながら、

多くの“変化”をもたらしてきました。

NPO×行政の協働により紡がれた

3カ年の事業の結末を、ぜひご覧ください。



↑ 知的障がいの特性を、分かりやすく
パンフレットにしてまとめました。



↑ 事業の様子をコルクボードに掲載し
店内に掲示しています。

協働事業を終えて.....



NPO法人ほっとハウス
理事長 松本千鶴

「この事業をすることができて本当に良かった。」と松本さんは言います。徳島市の危機管理課を始め、たくさんの方の協力を得て、自分たち自身の身の守り方を学べたこと、地域と関わりを持てたことは大きな前進。いつか障がいという壁を越えて互いを支え合えるような優しい社会を実現するために、これからもこういった活動を続けていきたいとのことでした。

この冊子は「徳島市協働による新たなまちづくり事業」の補助金により制作しました。

NPO法人ほっとハウスとは？

2000年4月に知的障がい者の地域共同作業所として設立。
知的障がい者に対し働く場を提供し、生活訓練を通して社会に適応する力を養う。
現在では焼き菓子や手芸品の販売を行い、地域の様々なイベントで出店活動や
小中学生との交流事業も行っている。



H P

障がい者にとって必要な防災とは何なのか、災害時に必要な心構えや、どのような問題が生じるのかを想定し、不安をできる限り取り除くための準備を進めることになりました。

二年目は「共助」ということで、地域の自主防災会や小学校の防災訓練に参加し、地域の方々との交流の起点をつくりました。そして三年目は「公助」ということで、地域の避難所へ「知的障がい者支援員」のバンダナを設置したり、これまでの学びで言語化された「知的障がい者の特性」などを広く知ってもらうためのツールを作り配布するなど、公共への働きかけを行う予定です。



大切な人を守るために
手を取り合う

↑NPO法人ほっとハウスと徳島市で何度も協議を重ねました。

協働の始まり

ほっとハウスは知的障がい者の地域共同作業所として2000年に設立されて以来、カフェ営業や手芸品の販売、中学校の職業体験の受入や地域のイベントに参加したりと、積極的に活動の幅を広げてきました。

理事長である松本さんは、ここに通う子どもたちのことを自らの家族のように大切にされています。だからこそ、活動を続けていく中で1つ不安に思っていたことがありました。

「もしも被災してしまったら、どうやってこの子どもたちを守ったらいいんだろうかって。それが分からなくて、どうしようって思ってたんですよ。」と、松本さんは、

当時の心境を振り返ります。無事に逃げることもできるのか、避難所での生活は大丈夫なのか、心配事を挙げればキリがありません。

そんなときに舞い込んできた話が、徳島市の「協働によるまちづくり」でした。行政と協力することで、新たな道筋が見えるのではないかと、そう思って協働事業に応募したそうです。

自助、共助、公助

この事業の特筆すべき点は「自助」

「共助」「公助」という順番で、年度ごとに活動の規模が広がっていくというところにあります。一年目は「自助」。

協働の価値

NPOと行政が手を組むことは、そう簡単なことではありません。状況や価値観の違いから、時に大きなすれ違いを生んでしまうということもあるでしょう。しかし、もし互いの強みを活かして、苦手を補えることができたらずきと、単独では成し得ることができなかった大きなことを、達成することができきるでしょう。ほっとハウスと徳島市危機管理課の協働は、そういったことを体現した成功例となりました。現場のこと、知的障がい者のことやそのご家族のこと、抱える悩みや不安を、誰より知っているのは当事者です。

ほっとハウスの存在は、そんな実情を正確に捉えてくれるとともに、経験に基づいた意見を与えてくれます。対して危機管理課は、防災に関する様々な知識や事例を有しており、地域のコミュニティセンターや社会への波及を務めてくれました。

NPOと行政がタッグを組み、各々の特色をもって互いを保管し合う。

生み出された信頼関係が、地域の課題を解決し得る力となっていく、これが「協働」することの価値なのです。次ページからは、そんな事業の詳細を年度ごとに紹介していきます。

1年目の取り組み(自助)

ワークショップの開催

一年目となるこの年(2018年)のテーマは“自助”。いざ災害が起こったときにどんな困り事が生じるのか、専門家を交えて勉強をし、どういった準備をするべきなのかについて二回のワークショップを通して学びました。「楽しく学びバッチリ備えストレス軽減」と題されたそのワークショップには、約40名もの人が参加し、積極的に意見を交わしながら被災時の状況について具体的なイメージを深めていきました。ワークショップに参加した人からは「災害時に必要なことがよく分かった。」

「地震が起きたときに、子どもがすぐ机の下に隠れるようになった。」など、防災に対する意識が大きく向上したとの声が寄せられました。

徳島市民総合防災訓練 (加茂名地区)への参加

加茂名小学校で開催された防災訓練にも参加しました。雰囲気は和やかでしたが、もし本当に災害時でみんながパニック状態だとしたら、きっと大変なことになるだろうと容易に想像できませんでした。トイレの問題や、人ごみの中で気持ちを落ち着かせるものの必要性など、防災準備に欠かすことが出来ない観点を学びました。

コミュニケーションカード

ワークショップや防災訓練への参加を通して学んだことを元に、コミュニケーションカードの制作を行いました。

これは、自分の気持ちを相手に話すことが苦手な人でも、カードを見せるだけで意思を伝えることができるようにするためのものです。例えば

「トイレに行きたいです」

「安全な場所に連れて行ってください」

「疲れて動けません」

というような内容の言葉が書かれており、他にも様々な状況を想定した文言が用意されています。

防災リュックの準備

防災リュックの制作も行いました。それぞれのリュックには「ヘルプマーク」も刺繍されており、コミュニケーションカードや心を落ち着けるために必要なものなどを詰め込みます。もちろん、非常食や水も用意し、災害への備えを進めました。

防災ピクニック

防災リュックを背負い、ほととハウスから加茂名コミュニティセンターへ移動。そこで防災リュックに詰め込んだものを実際に使ってみたり、簡易トイレや簡易更衣室の使い方を学びました。

一年目を終えて

「この年は勉強の一年だったなあ。よう頭使った(笑)事業を始める前に抱えていた漠然とした不安。問題点や不安点などが一つひとつ視覚化されていくことで、いつのまにか不安は減ったなあ。」と松本さんは言います。

この事業に参加した人からは「子どもだけではなく、親もこういう心配えが必要なのが認識できた。」という感想が述べられていました。

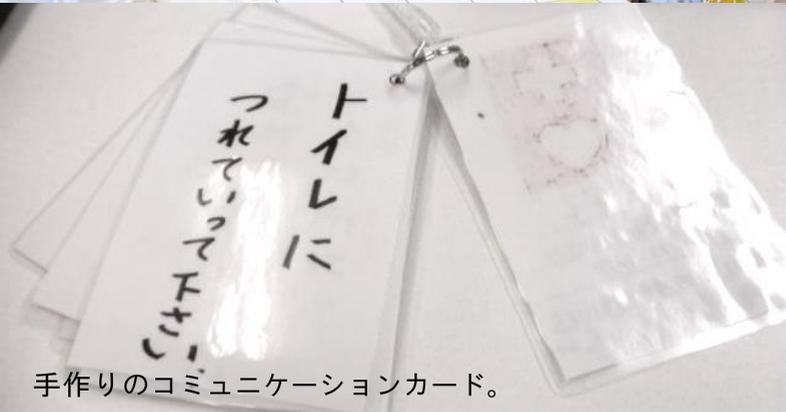
“自助”というのは「自ら守る」という意味があります。まずは自分自身の備えをすることが防災のスタート地点なのです。



グループワークの様子。



防災リュック。名前も刺繍されています。



手作りのコミュニケーションカード。



簡易更衣室も準備しました。

2年目の取り組み(共助)

外の世界へ

“共助”を目標とした二年目は、ほっとハウス以外の団体や場所に積極的に関わっていく年になりました。

災害時には家族やほっとハウスのメンバー以外に、面識のない周囲の人々の助けが必要になる場合があると予想されます。しかし、知的障がい者にとって慣れない状況や面識のない人に対応するということは、非常にハードルが高いことなのです。そのような状況に陥ったときのために、普段からどのような準備をしておくべきなのか。これが二年目の最大のテーマとなりました。

お母さん探しゲーム

2019年7月、この日は障がい児教育の専門家を招いて、共助について考えるワークショップをおこないました。保護者からは「防災について、障がいを持つ子どもたちにとどのように教えたらいいか」といった質問も寄せられ、より一層防災への知識と子どもへの向き合い方を深める時間となりました。

そしてこのワークショップの後半には「お母さん探しゲーム」と称した、コミュニケーションセッションの使用訓練が行われました。これは、子どもたちが自ら防災リュックに準備をしたコミュニケーションカードを用いて保護者の元へ案内

してもらおうというゲームです。

会場には子どもたちと面識のない大人を配置し、保護者の方は会場の別室に待機。結果としては全員が無事に目的地へ辿り着くことができました。中には、言葉に詰まってしまったり、立ち止まってしまったりしましたが、子どもたち同士で協力して、動けない子を引っ張っていくという思わぬ成長も見受けられました。

佐古の避難訓練

少しでも見知らぬ人が周りにいる環境に慣れるために、佐古自主防災会が主催する避難訓練に参加しました。

防災ビブスの制作

知的障がい者であるということは、外見だけでは判断ができません。そこで、災害時に何か目印となるものを着用すれば配慮を得られやすくなるのではないかと、防災ビブスを作成することになりました。更に、ビブス中央部に一言だけ文言を入れようということで、どのような言葉が良いのかについて八万地区防災訓練の参加者へアンケートを実施しました。

加えて、ヘルプマークの認知度や、知的障がい者であることを明示することについての是非も調査し、数多くの意見が寄せられました。

ミニワークショップ

二年目の出来事を振り返るミニワークショップを行いました。二年目は“共助”をテーマとしていましたが、主に「人と関わり」に大きな変化をもたらしました。ほっとハウスの子たちが知らない人や環境へ踏み出すことができたという点。これらの変化はいざ災害が起きたときに他者へ働きかけることができ、確率を増加させてくれます。

更に、この事業を通して知的障がいについての認知が広がることで、災害時に困る障がい者へのサポーターと成り得る人材の増加にも繋がっていくことが期待されます。



防災訓練の様子。



お母さん探しゲームの様子。



障がい教育の専門家による講演会。



保護者と合流。保護者の皆さんも一安心。